

巻 頭 言

聖泉大学 学長

木 村 知 子



COVID-19パンデミックにより、世界中の経済界や医療界に大きな変化をもたらしています。ウイルスは、アルファ株からベータ株、ガンマ株、デルタ株を経てオミクロン株へと生き延びるように変異してきましたが、人々の生活も様々に変わりました。2020年度は、入学式後から初の緊急事態宣言が発令され、学生の学内入構禁止状況となり、第1波から第3波が到来し、大学生活も著しく変わりました。今年度2021年度は、ゴールデンウィーク明けより第4波があり、しばらくして東京オリンピックの開催、その後はこれまではない感染拡大で第5波、第6波が襲ってきています。今やマスクのある生活は当たり前、そのマスクもカラフルになったりおしゃれになったりしています。

看護学部教員も今年度はワクチン接種業務や第5波においては、ホテル療養所での看護職の業務等に協力してきました。教員それぞれの立場で地域医療に微力ではありますが貢献でき、また実情を知る機会になったのではないのでしょうか。まだまだ勢力を発揮し続け衰えを知らないこのCOVID-19といかに付き合っていくのか、「with コロナ」とは言いながらも、先がなかなか見えない状況です。

本学では、COVID-19のクラスター発生はなかったものの、教授活動としての授業や演習、実習においては、昨年度以上に工夫を要してきました。そんな中で、リモートによる授業や臨地に出ることができない学内での代替実習もあり、従来よりも「なかなかいけるのでは!」と思える場面も多くあったのではないかと思います。改めて教育を振り返る機会にもなり、今後より充実した教育に結び付くことを期待しております。

そして、2021年度末、ここに例年通り、聖泉看護学研究第11巻を発行することができましたことをうれしく思います。今回は、原著論文1、研究ノート4、資料1、その他3の合計9本の論文が掲載されています。その他については、来年度からの看護基礎教育の新カリキュラムについて（看護師、保健師）、その検討経緯や特徴などをまとめていただきました。

今回は、多くの方に論文投稿をしていただくことができうれしく思います。教員の研究活動をより高め、聖泉看護学研究が教員や大学院修士修了生の成果報告の場として、活用されることを願って止みません。

最後に、このVol.11に投稿してくださった方、査読の先生方、編集を担当してくださった委員長の方、安田千寿先生をはじめとする委員の皆さまに、心からお礼申し上げます。

